

(2) 敵役クローディアスの心の動きを強調して

菅 生 千 明

私は、シェイクスピアの作品をいくつか授業で学んできました。中でもこの“Hamlet”は、復讐劇という重いテーマの中に人々の様々な心の動きや、自身への問いかけが表れていて面白く、好きな作品です。この作品は、主人公のハムレットの復讐心を中心にその力強い生涯と、理想を持ちながらも倒れてしまう悲劇的な姿を描いていますが、私がこの作品を演出するなら、ハムレットの復讐の相手となるクローディアスの心の動きを強調し、演出したいと思いました。クローディアスはハムレットの父を殺害し、ハムレットの母である王妃と結婚し、王位を奪った、劇の中では悪役と呼ばれる立場にあります。私は、ハムレットのように復讐に燃えている者の心の動きではなく、追われる立場である王の心の動きを視点として強調してみても面白いのではないかと考えました。特にクローディアスの良心や王位への執着、王から見たハムレットの行動を中心に見てみると、また新たな“Hamlet”の面白さが出てくると思います。

クローディアスとハムレットの対立はまだ激しさはないものの、すでに1幕2場に始まっています。クローディアスの台詞の中で、レイアーティーズに対し4度も親しみをこめて呼びかけ、ハムレットとの冷たい関係を際立たせています。このクローディアスのさりげないアピールは、早くも今後の展開を思わせています。その後、兄の死を嘆き悲しむ姿を示し、ハムレットのことを「息子」と呼ぶクローディアスに対し、ハムレットは“A little more than kin, and less than kind.” (1. 2. 65) と言い、すぐに受け止められない現実への反発と、王への親子の情がないことを示します。私はこの台詞はト書きとせずに、クローディアスにわざ

と聞こえるように言ったら2人の間の溝を強調することができ、より効果的になるのではないかと思いました。また、この台詞をクローディアスが聞くことによって彼の罪の意識が強まり、焦りが出てきてより心の動きが表れてくると考えました。しかし、ハムレットがこのような反抗的な態度を示し、クローディアスにとっても彼の存在は気分のいいものではないはずなのに、彼はハムレットに国にとどまることをお願いします。彼はのちにレイアーティーズにハムレットが民衆から好かれていること、ハムレットがいなくなったら王妃が悲しむと言っていることから、そのような理由で国にとどまらせておきたいと言ったという解釈もできます。けれど私は、彼は自分の兄を殺したという行為を引け目に感じていて、王位に執着し続け無事に王となった喜びの中でも不安にかられ、自分は周りの者たちに認められているのか自信のない気持ちの表れだったという私なりの解釈をしました。また彼が、ハムレットの親友たちにハムレットの狂気の原因が自分たちの結婚と、父の死以外にあるのか突き止めるよう命じる場面もあるように、クローディアス自身、自分の殺人は誰も知らない完璧なものだと言い聞かせながらやはりどこかで不安で、常に怯えていたのだと思います。この場面は、クローディアスが自身の罪にどれだけ苦しめられているか、同時に彼の犯した罪がどれほど重いものだったのかをわからせてくれます。何食わぬ顔で無実の王を演じる冷酷なクローディアスの、このような弱さに注目してみると冷酷さだけが強調されるのではなく、人間らしい一面もみえてきてまた違った面白さが出てくると感じました。けれど、逆に王があまり弱い部分を出してしまうと「ハムレットに敵対する王」という印象は薄まり、ハムレットの復讐心や強さばかりが強調されてしまいハムレットの一人舞台という感じになってしまいます。その為王の威厳を保ちつつも、時々見せる心の弱さや動揺を表すと、劇がまた違った印象になり面白く

なると思います。

劇の中では、王の良心が自身の罪に心を痛めていることがはっきりとわかる場面もいくつもあります。特に3幕1場の、“O, 'tis too true! / How smart a lash that speech doth give my conscience! / The harlot's cheeks, beautied with plast'ring art, / Is not more ugly to the thing that helps it / Than is my deed to my most painted word. / O heavy burden!” (3. 1. 45 – 54) の台詞は、初めてクローディアスが自分の罪を認めた台詞で、観客にとっても初めて真実を確認できた台詞となっています。その点においてこの部分は、この劇にとって大事な台詞になっています。テキストでこの台詞がト書きになっているのは、編者がつけたもので“O, 'tis too true!”の一文だけは、相手に調子を合わせて聞こえるように言った方が面白いとありましたが、私もこの台詞はクローディアスがポローニアスに向かって、動揺を隠しつつうわの空で言う感じにしたら、よりクローディアスの感情がわかりやすくなるのではないかと思いました。さらに3幕3場の祈りの場では、王が一人になって観客に告白を行う場面で、彼の苦しみが直接的に伝わってきます。“O, my offence is rank, it smells to heaven; / It hath the primal eldest curse upon't – / A brother's murder! Pray can I not, / Though inclination be as sharp as will.” (3. 3. 36-9) とクローディアスは深く苦しむ姿を表し、つい同情してしまいそうな場面ですが、最後には“My words fly up, my thoughts remain below. / Words without thoughts never to heaven go.” (3. 3. 97-8) と言い、観客が思うほど彼の罪の意識は低く、天国へ行く準備などできていないことがわかります。これ以後クローディアスは、弱さをいっさい見せずにハムレットと対立します。その後、王位への執着心をあらわにし、ハムレットに罫を仕掛ける王の姿は冷酷で、ハムレットの憎むべき相手だということを再認識させます。

私はこのように、ハムレットだけでなくクローディアスの心の動きに

注目してみて、ただ冷酷に感じていた彼の見方が変わり、この作品がさらに面白く感じることができました。また、罪に苦しむ姿がハムレットよりも人間味があると感じたところもありました。この“Hamlet”という作品は奥が深く、様々な批評もされていてそれぞれ違った見方をしていますが、私は、クローディアスの心の動きを強調して演出してみるのも面白いと思いました。

(3) 愛憎の情念を基調として

原 田 真 弓

『ハムレット』は、母に向ける息子ハムレットの「オイディプス・コンプレックス」、クローディアスの先王ハムレットに向ける「カイン・コンプレックス」、そして、レイアーティーズのオフィーリアに向ける妹愛、ホレイショーとハムレットとを繋ぐ友愛、オフィーリアとハムレットの儂い恋愛、など他にも色々な愛憎の情念が基になっている。

もし、私が『ハムレット』を演出するのなら、オフィーリアのハムレットに対する恋を純粹、精錬潔白なものとして強調し、何処までもハムレットだけを一途に想い、優しさ故に父親に逆らえなかった、心弱き者としたい。オフィーリアとハムレットとの間に身体の繋がりがあったか無かったのかという論があるが、断じて無かったものとする。たとえば、現代版だからと言ってオフィーリアを今の流行りの少女にしてしまえば、オフィーリアの持つ純粹華麗な象徴的な美しさが損なわれてしまうからである。

オフィーリアはハムレットを誰よりも愛し、また、愛されていると信じていなければならない。そして、ハムレットから辛く当たられること